

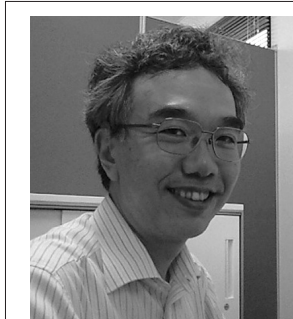


この人を たずねて

立命館大学文学部人文学科教授

北岡明佳氏

インタビュー
白岩祐子



Profile — きたおか あきよし

1961年、高知県生まれ。1991年、筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了。博士(教育学)。専門は知覚心理学。主な著書は、『錯視入門』(単著、朝倉書店)、『トリック・アイズ グラフィックス NEO』(単著、カンゼン)、『脳科学と芸術』(分担執筆、工作舎)、『人はなぜ錯視にだまされるのか?』(単著、カンゼン)、『心理学フロンティア』(分担執筆、新曜社)など。

■ 北岡先生へのインタビュー

— 先生は知覚心理学者であると同時に、錯視アーティストでもいらっしゃるんですよね。

錯視を作り、博物館などに頼まれて講演や展示をするのは楽しいですし、あまり突っ張るのもよろしくありませんので、アーティストですねと言われたら「ありがとうございます」と答えるようにしています(笑)。ただ作品を作ろうと思って錯視を研究しているというよりは、錯視を研究する中で成果を人に見てもらおう、そのための仕掛けが作品だと考えています。

— どうやって錯視を見つけるのですか。研究者でなくても錯視は見つけられますか。

「錯視には香りがある」という言い方をしていますが、この香りは誰にでも感じるができます。たとえば「蛇の回転」という錯視があって、これはわりと人気のある錯視なのですが、なぜ人気があるかという、「香りが強いから」なんじゃないかと思っています。これよりずっと香りが弱い

ものでもわかるのですが、普通の人は「あーこれは錯覚だ」と目をゴシゴシこすってリセットしてしまう。リセットしないでモヤモヤした状態のままにしておくことができればいいのですが、これは精神衛生上あまりよろしくありませんね。弱くても香るものを見つけると、私はだいたいカメラを持ち歩いていますので、とにかく写真を撮ります。ただ、こうして見つけたヒントは必ずしも磨いて取り出すことができるとは限りません。

— 錯視を磨く、という表現が面白いですね。

錯視の中には、それほど錯視量の多くないものがあります。これには、もともと錯視量が少ない場合と、磨き方が足りなくてそうなっている場合とがあって、後者については、見た人が「おお!」となるような状態が本来のあるべき姿だと思っています。ある先生が「錯視図形は“よい”ものでなければいけない」と仰っていて、「よい」とは錯視量が最大という意味なのですが、この考え方を私も踏襲しています。つまり「この

錯視は本来あるべき姿を現しているか」という観点が重要なのですが、錯視のメカニズムに関する仮説があれば、「あるべき姿」を想定することもできます。そのような理論的なアプローチも致します。

— ひとつの理論からたくさんの錯視パターンを生み出すことができますか。

そうですね。ただ個人的には、ある原理を見つけたら本当にそのとおりに動作するかを確認して、いくつかの代表作を作ることができれば満足、という感じです。同じ原理の錯視を使ってたくさんのパターンを作りたいという意欲はない、その意味でやっぱり私はアーティストではないですね。

— 論文を英語でお書きになっていますが、留学のご経験がないのにどうしたら書けるんでしょう。

とにかく英語で書いて投稿するだけです。特に院生時代にそうしました。通るかどうかは、英語力ではないです。文法が正しく、意味がわかるように書いてあれば、内容次第で通ります。日本語の論文と一緒に、意味が伝わるかどうかは話の組み立て方によります。最後の最後はみっともない程度にコピーエディターが直しますし、流暢な英語が書けるかどうかは問題ではないと思います。ただ英会話については、学生のときもきちんと勉強すればよかったと思っていますけど、今からだって遅くはありませんね。

— 学部時代のご専攻は生物学で

すね。

はい。修士論文と博士論文もネズミの研究で、もともとは動物心理学で身を立てるつもりでしたがポストが見つからなかったので、東京都の神経科学の研究職に就いたんです。そこで、空いている時間に知覚の勉強を勝手に始めました。当時パソコンが普及しはじめた頃で、錯視研究の刺激図形の多

くはまだ手描きによるものでした。ですから、私がパソコン上で線を引いたり塗りつぶしたりしながら新しい錯視を作ると、「それ面白いね」って。そのときの研究上の建前は「サルに見せる刺激を作る」というものでしたけど、結局サルには一度も錯視を見せることなく研究所を離れました。錯視の研究を始めたのはいわば苦し紛れでしたが、たまたま私と時代に合っていて、ラッキーなことでした。——ネズミの研究は錯視研究に役立っていますか？

全然役に立っていません（笑）。ラットやマウスの情動性と錯視は全く関係ないですね。ただ、学生時代は本気で動物心理学の研究者になるつもりでしたし、それが叶わなかったのはひとえに職がなかったから。つまり「もうイヤになった」という理由で研究テーマを変えたわけではないということです。ただ、入ってくる知識は新しいものですが、研究の構造、人に伝わる話し方や言語などは同じですから、その意味では決して無関係というわけでもないな、とも思います。

——今、取り組んでおられるテーマについて教えてください。

「顔ガクガク錯視」といって、顔のパーツを二重にすると顔がガクガク見える錯視に関心があります。鼻を上下に配列させるとガクガクに見え、横に置くとピクピク感になるのに、片目の中に黒目を二つ入れるとそう見えないなど、顔のパーツを二重にしたときに動きとして見えるものとそうでないものがあるので、その理由を、可動性という認識機能に関する仮説から明らかにできないかと考えています。

——著名な錯視には作者の名前が冠されていますが、北岡先生のお名前のついた錯視はありますか。

今まで、作者が自分で自分の名前をつけたことはなくて、ツェルナー錯視もミュラー・リヤー錯視も、後世の人がそう呼んだのですよ。ですから、私の代表的な錯視が「北岡錯視」と呼ばれるようになるかどうかは、これは本人にはどうしようもないです。要するに、「北岡さんはいい人だったからこれは“北岡錯視”と呼ぼう」となるのか、「死んじゃったからもういいや」となるかは、人柄の問題で（笑）、後は運次第というわけです。

■インタビューの自己紹介

インタビューを行なった感想

インタビューのやりとりから端々に現れる、気さくでユーモア溢れる北岡先生のお人柄に触れ、その一端でもお伝えすることができればと願いつつ原稿をまとめました。個人的には、動物心理学（ネズミ）から錯視研究へのご転進にまつわるエピソードを特に興味深く伺いました。北岡先生のお立場とはまったく違いますが、8年間の会社員経験をゼロ・リセットして研究の道を志している私にとり、「ネズミ研究の経験は錯視の研究には役立っていないけれど、結局やっていることの枠組みは同じだから」という先生のご指摘は印象的でした。私もいつか、今の自分のように遠回りして研究の端緒についたばかりの人に、「何かひとつのことに没頭した経験はかならず活きますよ」と伝えられる

ようになりたいと思います。

なお、インタビューの中にも出てきた「蛇の回転」を含む錯視の多くは、先生のホームページ¹でも見ることができます。

今、どのような関心をもって心理学の研究に取り組んでいるか

人々の法的判断プロセスについて検討しています。特に着目しているのが、個人に内在化されている裁判イメージと、裁判員としての市民に期待されている役割の認知が、法的判断にどのような影響を及ぼすかという点です。裁判員制度の導入では、一般市民の常識や感覚が司法に反映されることが期待されていますが、現在でもほとんどの人にとって裁判所はなじみがうすく、敷居の高い場所です。研究テーマとして「判断バイアス」を検討したいという欲求もありますが、同時に、市民に期待されている具体的な役割についてのコンセンサスがなく、人々に戸惑いがある現状では、ネガティブ側面の指摘ばかりをすることにあまり政策上の益はないとも思います。職業裁判官が必ずしも「判断バイアス」から免れているという実証的知見もありません。したがって、人々の法的判断プロセスや志向、教示に対する反応などについて、基礎的な知見を積み上げていく段階に今はあると考え、そのような研究をめざしています。

1 「北岡明佳の錯視のページ」
<http://www.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/>



Profile — しらいわ ゆうこ

1998年、早稲田大学文学研究科心理学専攻修士課程修了。同年4月より2006年3月まで株式会社リクルートに勤務。2009年、常磐大学被害者学研究科修士課程修了。現在、東京大学人文社会系研究科社会心理学専攻博士課程に在学中。専門は社会心理学、被害者学。研究テーマは、市民の法的判断プロセスの他に、犯罪被害者の司法に対する信頼など。